

# 国立国語研究所学術情報リポジトリ

鶴岡市大山方言の用言の活用：  
通時的背景をめぐって

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2020-06-29 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 大西, 拓一郎 メールアドレス: 所属:
URL	<a href="https://doi.org/10.15084/00002911">https://doi.org/10.15084/00002911</a>

# 鶴岡市大山方言の用言の活用

— 通時的背景をめぐって —

大西拓一郎(言語変化研究部第1研究室)

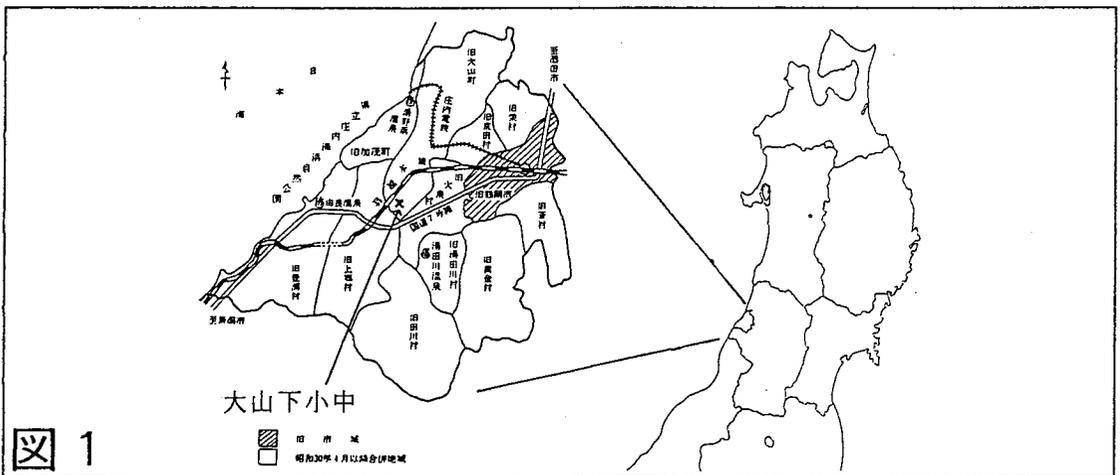
## 1. はじめに

本稿は『鶴岡方言の記述的研究』(国立国語研究所(1994), 以下『報告書』と呼ぶ)の中から, 大西が担当したIV章の「鶴岡市大山方言の用言の活用」(大西(1994a))を要約し, その後の考察を盛り込んだものである。特に通時的な考察の部分をやや詳しくしている。『報告書』の執筆から時間を経て, 多少考えをあらためた部分もあれば, わずかながらも視野をひろげ, 発展させたところもあり, 内容にいくらか異なりのある点をことわっておく(もっとも当該方言の言語的な事実の報告に関して基本的に異なりのあるものではない)。ここでは鶴岡市大山方言の動詞・形容詞・形容動詞の活用について共時的に記述を行いながら, 動詞・形容詞を中心に通時的な成立・発展の問題について考えてみることにする。この方言の用言の活用の特色として次のような点を指摘することができる。

- I. 動詞の活用では, 共通語のラ行五段活用に相当するものと一段活用に相当するものが非常に類似し, また, サ変が五段に類似している。
- II. 形容詞の活用では, カリ活用に相当する形式が認められず, また, 連体(終止)形が語幹に入り込んだ形式が認められる。
- III. 形容動詞の活用では, 「～な」「～なら」などのナリ系の形式が認められない。

特に動詞の活用の特色の前半については, 地域的にややずれるものの, 庄内方言の特徴として古く斎藤(1936)から指摘されていたことであり, その点を再確認できたと同時に, さらに詳しい記述データが得られたものと考えられる。

主たる話者は佐藤治助氏である。佐藤治助氏は1922年, 鶴岡市大山大字下小中生まれで, 1960年頃から鶴岡旧市街地に居住している。言語形成期を過ごした鶴岡市大山地区は, 鶴岡の旧市街地ではない(図1参照, 旧西田川郡大山町: 1963年鶴岡市に合併)。ゆえに旧市街地とはいくぶん異なった点があるかもしれない。しかしながら, かえって鶴岡方言の, また広くとらえて庄内方言の古層を伝えている可能性がある。事実, 先にも少し触れた斎藤秀一の一連の記述に通じる点がかなり見出され, 現在の旧市街地の出身者からはなかなか得がたい形態を聴き出すことができたものと考えられる。



表記にあたって、『報告書』Ⅳ章では、音韻表記を用いたが、ここでは見やすさを勘案して、音韻的な対立を崩さない範囲でのカナ表記も併用する(『報告書』Ⅱ章の井上(1994)も参照)。また、アクセントについては『報告書』Ⅲ章の新田(1994)を参照のこと。

主たる話者の音韻ならびに音声的な特徴を簡単に記しておく。

単独母音のi/eの区別はないようである。ここではeで代表する。ただし、中央語のアイの連母音に対応するεはeから区別される。

si/suならびにzi/zu, ci/cuの区別はないようである。ここではsu, zu, cuで代表する。se, zeの音声内容は [je] [se] である。

## 2. 動詞の活用

当該方言の動詞の活用の共時的な状況について、その概略を説明し、通時的な問題点を考察する。

### 2.1. 共時的概要

動詞の活用の概要は表1に記したとおりである。それぞれの活用形に後続する助動詞・助詞ないしは単独での意味・用法の代表については表1に示したが、代表以外については表2に記した。

表1 動詞の活用表

活用形 番号	子音語幹1(2)				子音語幹3	子音語幹4	子音語幹5	母音語幹1			母音語幹2	活用のタイプ
	書く	研ぐ	出す	死ぬ	食う	来る	為る	起きる	答える	開ける	取る	
	kag	toŋ	das	sun	k	k	s	ogi	kodε	age	to	
1	a	a	a	a	a	o	a	-	-	-	-	nε(否定)
2	i	i	u	i	ue	i	u	-	-	-	-	Qdε(希望)
3	i	i	u	i	ue	i	u	-	-	-	ri	soRda(様態)
4	u	u	u	u	u	uru	uru	ru	ru	ru	ru	言い切り
5	u	u	u	@suN	uN	uN	uN	N	N	N	N	na(禁止)
6	u	u	u	u	u	uQ	uQ	Q	Q	Q	Q	ro(推量)
7	u	u	u	@suN	uQ	uQ	uQ	Q	Q	Q	Q	ke(過去回想)
8	e	e	e	e	e	oe	e	re	re	re	re	命令
9	e	e	e	e	e	ie	ue	re	re	re	re	nε(可能否定)
10	o	o	o	o	o	o	o	ro	ro	ro	ro	意志
11-1	a	a	a	a	a	x	a	x	x	x	x	seru(使役)
11-2	x	x	x	x	x	o	x	-	-	-	-	raseru(使役)
12-1	x	x	u	x	u	i	u	x	x	x	-	ta(過去)
12-2	@kae	@toi	x	@suN	x	x	x	-	-	-	x	da(過去)
13-1	x	x	u	x	u	i	u	x	x	x	-	Qta(継続)
13-2	@kae	x	x	x	x	x	x	-	-	-	x	Qda(継続)
13-3	x	@toi	x	x	x	x	x	x	x	x	x	Nda(継続)
13-4	x	x	x	@suN	x	x	x	x	x	x	x	da(継続)
	四段(ら行を除く) ナ変					カ変	サ変	上一上二下二			四段5行 (ラ変)	活用の類との対応

活用表の作り方・見方は単純でごく一般的な見解に従うものである。

すなわち、活用語がさまざまな活用形をとる際におおむね変化しない部分を語幹、それぞれの活用形から語幹を取り去った部分を語尾としている。活用表において、活用形番号に対応した位置に示したものが語尾である。また、活用形とは、活用語それ自体で特定の表現形式を表したものにおいてはその形をさし、活用語に助詞や助動詞が付いて特定の表現形式を形成したものにおいてはそこから助詞や助動詞を取り除いた形を言う。

活用表から具体的な語形を得るためには「語幹+語尾+助動詞・助詞等」の順で並べればよい(例えば「書かない」であれば、"kag+a+nε=kaganε")。語尾が"- "となっているものは語尾が「なし」であることを示しており、結果的には「語幹+助動詞・助詞等」で語形が得られることになる(例えば「起きない」であれば、"ogi+nε=oginε")。"×"は狭義の活用体系(形式的な活用体系)上、当該の助動詞・助詞に接続する活用形がないことを示している(広義の活用体系としての文法意味論的な活用体系の問題とは関係ない)。頭に"@ "が付いているものは共時体系の上では交替語幹(『報告書』IV章では音便語幹としたが、これは、通時的な分類に与え、用語を変更する)である。「交替語幹+助動詞・助詞等」で語形が得られる(例えば「書いた」であれば、"kae+da=kaeda")。

語幹が子音で終る動詞を子音語幹動詞と呼び、母音で終る動詞を母音語幹動詞と呼ぶことにする。そして、さらにそれぞれの中を語尾の異なりによって分類した(子音語幹1(2)~5, 母音語幹1~2)。ただし、その際、似かよった語尾を持ちながら微妙な異なりを持ち、同時に語幹末の子音に注目するならば相補分布を示すものについては、同等のタイプに属するものとみなすような手続きをとっている(『報告書』IV章で独立させた子音語幹2「死ぬ」は、わざわざ子音語幹1から分ける必要はないという見解に現在はいはかわっている)。

表現形式上の注目点のひとつとして、テンスに関わる過去の形式とアスペクトに関わる継続相の形式の類似が挙げられる。この形式に関わる文法的意味論的な分析は、『報告書』V章にあたる渋谷(1994)を参照のこと。その他、活用形10の意志形が接続助詞に前節する形式を持ち、モーダルな意味を含んだ条件表現を表す点も興味深い。

なお、『報告書』VII章(篠崎(1994))で扱われる授受動詞の「ケル」は母音語幹1に分類される。

表2 代表以外の後続する助動詞・助詞等

活用形番号	後続する助動詞・助詞ないしは単独での意味・用法(代表以外)
3	masu(丁寧), masunε(丁寧否定)
4	連体修飾, Ndero(推量)
5	dero(推量), domo(逆接), nadaba(仮定)
6	sagε·hagε(原因理由), goNdaba(仮定)
7	kero(過去回想推量)
8	ba(仮定)
9	ru(可能)
10	ba(意志仮定), domo(意志逆接)
11-1	haru(尊敬), eru(受身・可能), seraeru(使役受身), enεR(可能否定)
11-2	saharu·raharu(尊敬), raeru(受身・可能), raseraeru(使役受身), raenεR(可能否定)
12-1	te(中止), tesumata(~しまった), taQke(過去回想), taro(過去推量), tadero(過去推量)
12-2	de(中止), desumata(~しまった), daQke(過去回想), daro(過去推量), dadero(過去推量)
13-1	QtaQke(継続過去回想)
13-2	QdaQke(継続過去回想)
13-4	daQke(継続過去回想)

## 2.2. 通時的考察

細かく活用形を見て行くなれば、説明すべき部分は多々あるが、大きく活用体系としてとらえた場合に、通時的に興味深い部分にしばって話を進めることにする。

当該方言の動詞の活用の通時的な注目点としては、先に1.でも述べたが次の2点を挙げることができよう。

①共通語のラ行五段活用に相当するものと一段活用に相当するものの類似。

②共通語の五段活用に相当するものとサ変の類似。

①は、共時的な分類で言うならば、母音語幹1と2との類似であり、母音語幹2の存在そのものとも言える。②は、子音語幹1と3の類似である。

ところで、「活用の類」という考え方を大西は提唱している。「活用の類」についてのおおまかなところは『報告書』IV章でも述べたが、やや詳しくは大西(1994b)で解説した。「活用の類」とは、動詞の活用に関して全国方言の通時的な対応に基づく最も根本となる語彙のグループ分けを指すもの、と概略言える。概念そのものが、広く受け入れられているものではないのでわかりにくいかもしれないが、極めておおざっぱに言ってしまうと、古典語の活用体系の枠組みに対応した動詞の分類と言っても誤りではない(根本でやらずにはあるが)。

「活用の類」は上一段類・上二段類・下二段類・四段類・カ変類・サ変類・ナ変類・ラ変類の8種類(もしくは下一段類を含めて9種類)ある。これらが各地方言の活用体系に応じて「統合」している。その統合の状態を比較するならば、全国方言の動詞の活用を通時的に扱う尺度として有効に働くと考えている。

この「活用の類」の考え方で言えば、当該方言は、A.上一段類・上二段類・下二段類が統合し、B.四段類・ナ変類(・ラ変類・下一段類)が統合し、C.カ変類とD.サ変類がそれぞれ独立して、A.~D.がそれぞれ区別されている、と言える。このような「活用の類」の統合状態を「上一 上二 下二/四 ナ変/カ変/サ変」のように表示することができる。

この統合状態の中を詳細に見ると、「四段類ら行」がB.から分離し、A.の「上一 上二 下二」に接近しているのが上の①の注目点である(表1の「活用の類との対応」も参照)。

なお、表1で見ると母音語幹1と2は語幹末母音の種類で相補的な関係にあるように見えるが、実際はそうではない。母音語幹2には次のような語幹を持つ語が所属している。

wa(割る), ada(当る), niŋi(握る), cugu(作る), hine(捻る), ke(蹴る), ke(帰る)

それでは、①の注目点の発生した過程を考えてみよう。

母音語幹2は活用の類では「四段類ら行」に所属する。これらの活用形1の否定形では、現在は活用語尾が「なし」(-)になっているが、古くは「ra」が存在したと考えられる。それが、まず撥音「N」に変化した。これは近隣諸方言にも知られる事象である。さらにこの撥音の脱落が起り、現在の形が発生したものであろう。当該方言で撥音の脱落はすべての環境で義務的・規則的なものではないが、ここでの撥音の脱落については調音位置から音声学的にも納得の行く変化である。「取る」「割る」を例にとれば、次のような過程を示すことができる。

「取らない」\*toranɛ > \*toNnɛ > tonɛ

「割らない」\*waranɛ > \*waNnɛ > wanɛ

それ以外に活用形12における促音便の脱落もあり、「ら行」に基づく語尾のいくつかの部分脱落させることとなった。

一方、母音語幹1は活用の類では「上一 上二 下二」に所属する。これらはいわゆる「二段動詞の一段化」を経て、さらに「一段動詞のラ行四(五)段化」の途上にあるものと考えられる。その顕著な例が活用形8の命令形の語尾reである。この点は、『方言文法全国地図』(以下GAJと略称)第2集(国立国語研究所(1991))の85~88図を参照すれば、まさに当

該地域がその分布の中に位置していることがわかる。活用形10の意志形の語尾roも関連するものと考えられるし、分析上、助動詞に分類したが、raseru(使役)のraの部分もやはり関わるものと思われる。

以上のように、別の道をたどって母音語幹1動詞と母音語幹2動詞は接近したと考えられる。接近したものの、詳しく見れば異なりはある。ひとつは活用形3である。ただし、この活用形については後続する助動詞などの使用にやや不安定なものがあり、その点ではむしろ、接近を裏付けると言えるかもしれない。その他異なりが見られるのは活用形12と13であり、この異なりは明確である。過去の形式と継続相の形式に関わるもので、次のようである(意味論的に正確を期すればテンスとアスペクトの枠はクロスさせるべきだがここでは省略)。

過去形

母音語幹1：活用形12+ダ  
 オギ+ダ=オギダ(起きた)  
 アゲ+ダ=アゲダ(開けた)  
 母音語幹2：活用形12+タ  
 ワ+タ=ワタ(割った)  
 ト+タ=トタ(取った)

→母音語幹1にはダが付き、  
 母音語幹2にはタが付く。

継続相形

母音語幹1：活用形13+ッダ  
 オギ+ッダ=オギッダ(起きている)  
 アゲ+ッダ=アゲッダ(開けている)  
 母音語幹2：連用形+ッタ  
 ワ+ッタ=ワッタ(割っている)  
 ト+ッタ=トッタ(取っている)

→母音語幹1にはッダが付き、  
 母音語幹2にはッタが付く。

このような①の特色については、先にも挙げた齋藤(1936)が早くから指摘していたことである。齋藤はこの二つをまったく同一化したと指摘したが、齋藤の示すデータを見ても、上記のような異なりは確認されることから、やや「言い過ぎ」がある。その点を見直せば、結果的に本稿での記述と矛盾するものではない。むしろ、積極的に齋藤秀一の記述を裏付けたものとも言えよう。なお、部分的ではあるが、このような傾向について言語地理学的に指摘したものとして井上(1981)があり、「わからない」がワガネアとなる地域について記述されている。

もう一つの注目点は②であるが、これは「サ変類」と「四段類」の接近と言い換えられる。ただし、接近とは言えても、表1からもわかるように当該方言においては統合しているとは言えない状況にある。しかし、近隣の方言に目を移すならば、統合の進んでいる地域がある。図2(GAJ2・3集をもとにして分析した大西(1994b)による)に示したように秋田から青森にかけてそのような地域(統合を示す「四サ変」に注目、「上一上二下二/四サ変ナ変/カ変」の地域)が連続的に分布しており、当該地域もそれに接するものである。地理的にも、統合に向けての過渡的な状況の中に位置付けられるように思われる。

先にも述べたように、当該方言の動詞の活用は、全体としておおまかに見るならば、「上一上二下二/四ナ変/カ変/サ変」という活用の類の統合状態の中にある。その点では、実は現代共通語と同じ状況にあると言える。この点は図2の地域を参照しても理解されるであろう。しかし、その中をさらに詳しく見て行くならば、そこからさらに進んだ状況にあるとも言える。つまり、端的に述べるならば現代共通語のような状況よりもさらに新しい状態にあるとも言えるわけである。ただし、これは現代共通語との対比のみを念頭に置いたからこのように言うのであって、本来ならばさらに諸方言と比較して通時的な対応を考察していく必要がある。ゆえに、このことをもって、通時的な対応として現代共通語の状況を当該方言の活用体系の直接の母体と速断することは危険であるし、実際そうではないだろう。しかしながら、類の統合の状態から見た場合、通時的な大きな流れの中でとらえるならば、上記のように考えることも、ひとつの見方としては、誤りではないはずである。

活用の類の統合

- レベル2 (下-を除いた統合状況) -

- |   |                         |   |                       |
|---|-------------------------|---|-----------------------|
| ● | 上-上二/下二/四/加数/サ数/ナ数 — 2次 | ▲ | 下二/上- 上二 四/加数/サ数      |
| ▲ | 上-/上二/下二/四 加数/加数/サ数     | ◀ | 上二 下二/上- 四 加数/加数/サ数   |
| ▲ | 上二/下二/上- 四/加数/サ数/ナ数     | ▲ | 上- 上二 下二/四 加数/加数/サ数   |
| ■ | 上- 下二/上二/四/加数/サ数/ナ数     | 6 | 上- 上二 下二 四/加数/ナ数      |
| ■ | 上- 上二/下二/四/加数/サ数/ナ数     | △ | 上- 上二 下二 四/加数/ナ数      |
| ◀ | 上-/下二/上二 四/加数/サ数/ナ数     | △ | 上- 上二 下二 四/加数/ナ数      |
| ◀ | 上-/上二 下二/四/加数/サ数/ナ数     | ↑ | 上- 上二 下二 四/加数/ナ数 — 7次 |
| ▲ | 上二/下二/上- 四 加数/加数/サ数     |   |                       |
| ▼ | 上- 下二/上二/四 加数/加数/サ数     |   |                       |
| ▲ | 上- 上二/下二/四 加数/加数/サ数     |   |                       |
| ◀ | 上-/下二/上二 四 加数/加数/サ数     |   |                       |
| ◀ | 上-/上二 下二/四 加数/加数/サ数     |   |                       |
| 6 | 下二/上- 上二 四/加数/サ数/ナ数     |   |                       |
| 6 | 上- 上二 下二/四/加数/サ数/ナ数     |   |                       |

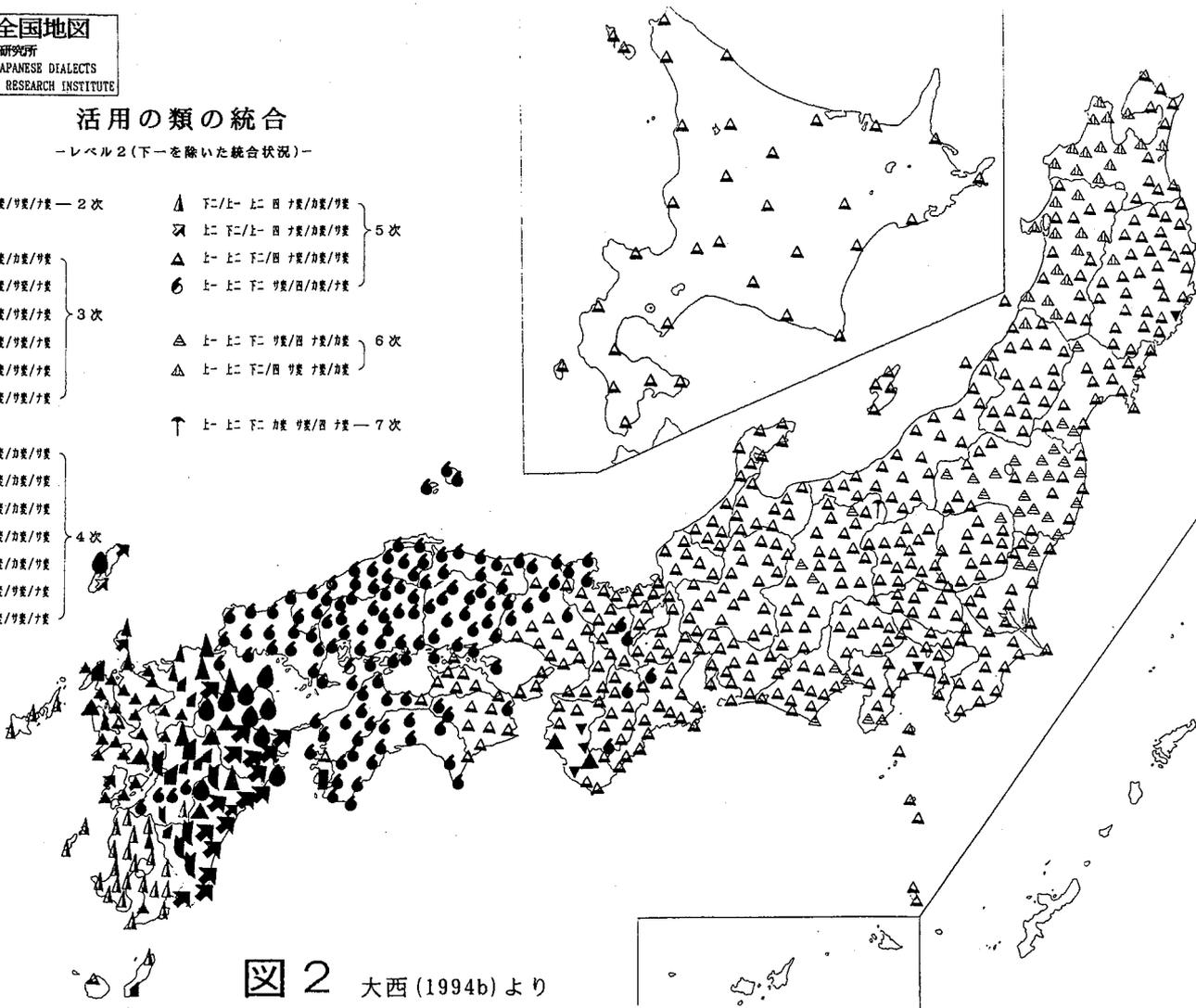


図2 大西(1994b)より

### 3. 形容詞の活用

形容詞の活用は表3の活用表に示したとおりである。代表以外の後続する助動詞・助詞等については表4に示した。

形容詞については2種類の活用のタイプが認められるが、語幹末母音でみると相補分布をなしており、共時的にはこの二つのタイプは本質的に大きく異なるものではないと考えられる。ここでは、語幹末母音がi・u・e・ε(「大きい」～「高い」)のタイプをA型形容詞、o(「遅い」)のタイプをB型形容詞と呼ぶことにする。

この活用体系の通時的な注目点は活用語尾のありかたと語幹の形成という観点から次の2点にしばることができる。

- ①カリ活用に相当する形式が認められない。
- ②ク活用に相当する活用語尾グの前に連体形(終止形)相当の形式(タッゲア「高い」のような形)が入り込む。

これらについてGAJ3集の形容詞関係の項目を総合的に扱って、全国的な状況の中から考察してみる。

まず①のカリ活用の問題から扱う。

GAJ3集では形容詞「高い」の8項目について地図化している(連体・否定・～て・～なる・過去・推量・仮定1・仮定2)。本土方言にしばって、この8項目の中で何項目にカリ活用が現れたかを数えて地図化したのが、図3である(併用回答については一定の手順でいずれかの回答を選択できるにはなかったが、詳しい手順は紙幅の都合で省略する)。

これでわかるように九州にカリ活用が盛んであり、これが琉球方言のクアリ活用といわれるものやサアリ活用といわれるものに連続していることが予測される。その一方で、全国何ヶ所かにカリ活用の用いられない地域がある(「蝶形記号」で示した地域)。そもそも現代共通語の口語でもカリ活用はそれほど勢力はないのであるが(～タへの接続がほとんど)、まるでブラックホールのようにカリ活用のない地域が存在することは興味深い。

実は、これをどう解釈すべきかは難しい。ひとつはカリ活用の衰退とする見方もあろうし、もうひとつはもともとカリ活用が発達しなかったという見方もできよう。

いまもって、これに対する明確な回答は持ち合せていない。ここでは、ポイントとなり

表3 形容詞の活用表

	大きい	新しい	良い	高い	遅い	
	oQki	adarasu	e	taQgε	oso	語幹
	i	u	e	ε	o	語幹末母音
活用形番号						主な後続の助動詞・助詞 ないしは単独の意味・用法
1	gu	gu	gu	gu	gu	nε(否定)
2	-	-	-	-	e	言い切り
3	-	-	×	-	-	migi(強調)
	A型形容詞				B型形容詞	

表4 代表以外の後続する助動詞・助詞等

活用形番号	後続する助動詞・助詞ないしは単独での意味・用法(代表以外)
1	aNmε(否定推量), de(中止), naru(なる)
2	連体修飾, ro(推量), dero(推量), Ndero(推量), Qke(過去), kero(過去推量), roke(過去推量), keNdero(過去推量), soRda(様態), joRda(様態), doja(伝聞), ba(仮定), nadaba(仮定), domo(逆接), roba(推量仮定), rodomo(推量逆接)

方言文法全国地図  
 国立国語研究所  
 GRAMMAR ATLAS OF JAPANESE DIALECTS  
 THE NATIONAL LANGUAGE RESEARCH INSTITUTE

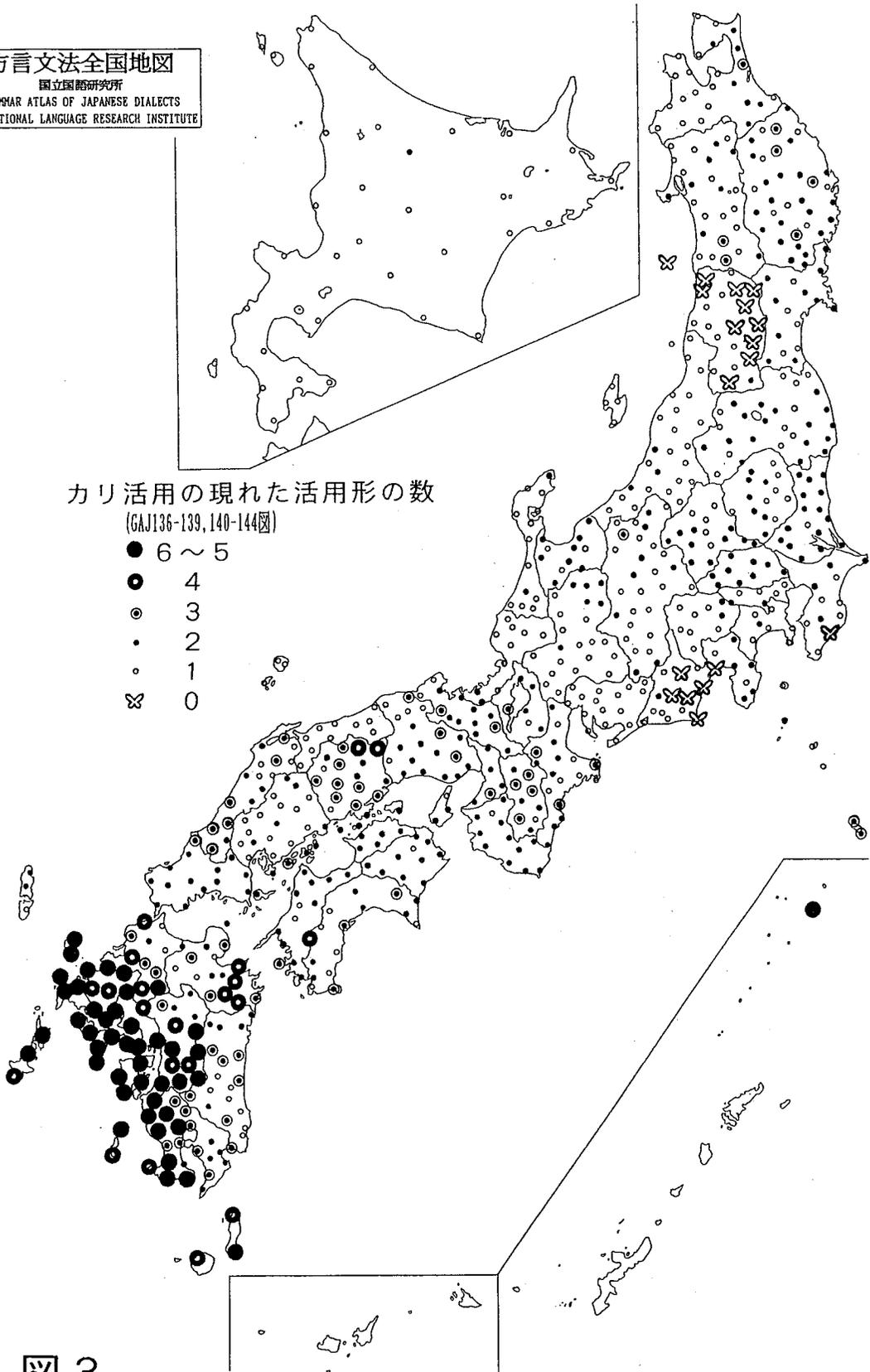


図 3

そうな点を列挙しておくにとどめる。

ひとつは、カリ活用のない地域は、過去形において、ケを用いる地域にほぼ重なることが挙げられる(当該方言もこれにあたる)。そして、鶴岡市街地の社会言語学的調査ではケが増えていく様子が知られ(国立国語研究所(1954・1974))、その意味ではカリ活用が衰退している。ただし、これをもって鶴岡市街地以外にも広く一般的な方向として断言すべきかどうか迷うところである。

また、ケの品詞論的な機能の変化が何か関係あるのではないか。これは、助動詞から終助詞化という方向を想定するものだが、当該方言も含めて山形県では広く助動詞として機能していると見られ(斎藤(1934・1959))、ひとすじなわでは行かない。

その他、関連しそうな問題としては、ク活用の方でもケレに相当する形式が欠如していることが挙げられるかもしれない。この点は、GAJ3集143図「高ければ」でそのような地域が東北地方にかなり広く分布していることが確認される。つまり、形容詞の活用が全般に簡略な地域との重なりがあるということである。

結局、この点は課題としたまま、②の問題について考察してみよう。

②の問題は、終止形や連体形相当の形式が語幹に相当する部分に入り込む現象で、形容詞の「無活用化」と言われたりすることもあるものである。当該方言ではA型形容詞の語幹末がεのものにタゲアグのような形で顕著に見られる。

これについては、特定の活用形の中で母音の融合が起こり、そこに他の母音が発生した場合に活用体系というものは一気に複雑になることを背景にして、活用体系を整合化する力が働いたものではないかと考えられる。

例えば、次のような活用を持った方言があったとする。

- (1) 「高い」 takakatta takakute takai takakereba takainara  
「黒い」 kurokatta kurokute kuroi kurokereba kuroinara

ここにai>eeという音韻変化が被さると、

- (2) 「高い」 takakatta takakute takee takakereba takeenara  
「黒い」 kurokatta kurokute kuroi kurokereba kuroinara

のようになり、「高い」において(1)では語幹がtakaで安定していたものが、(2)ではtakのように抽象的な形式を想定したり、語幹や母音の交替を考えたり、はたまた「黒い」とは別の活用の枠を与えなければならない、などなど複雑なことが起こってしまう。そこで、これを整合化するために融合から発生した母音を語幹に取り入れるわけである。

- (3) 「高い」 take(e)katta take(e)kute takee take(e)kereba takeenara  
「黒い」 kurokatta kurokute kuroi kurokereba kuroinara

そうすると、少なくとも(2)より活用としての体系性はかなりすっきりする。

母音の融合から他の母音が発生し、それが活用体系を複雑にするのは終止形・連体形からばかり生じる問題ではない。例えば、ウ音便である。

- (4) 「高い」 takakatta takooto takai takakereba takainara

(4)のようにウ音便を持つ方言においても、(1)と較べれば、活用は多少なりとも複雑である。そこで、方言によっては、takokattaやtakokerebaのような形式を生み出して、整合化をはかるものと考えられる。

このように連体(終止)形や連用形が母音の融合から新たな母音を発生させ、それを既存の活用語尾の前(語幹相当部分)に取り込んだ形式(以下「融合母音取込型」)について全国的な状況を示したのが、図4である。図3と同様な手順で、本土方言にしぼって、GAJ3集の形容詞8項目の中で何項目にこのような形式が現れたかを数えて地図化している。

おおまかには、東北地方から北信越にかけての地域と九州の南東部にまとまった分布のあることがわかる。そして、母音の融合を持つ地域の中にこの分布はおさまっている。

方言文法全国地図  
 国立国語研究所  
 GRAMMAR ATLAS OF JAPANESE DIALECTS  
 THE NATIONAL LANGUAGE RESEARCH INSTITUTE

ク活用・カリ活用の中に  
 連体(終止)/連用形が  
 取り込まれた活用形の数  
 (GAJ136-139, 140-144図)

計	連体(終止)	連用
	クク・クケレ クカなど	クコレ クカなど
● 7~6	7-6	0
◐ 5	5	0
◑ 4	4	0
▲ 4	0	4
◎ 3	3	0
▲ 3	0	3
○ 2	2	0
◐ 2	1	1
△ 2	0	2
◦ 1	1	0
▲ 1	0	1

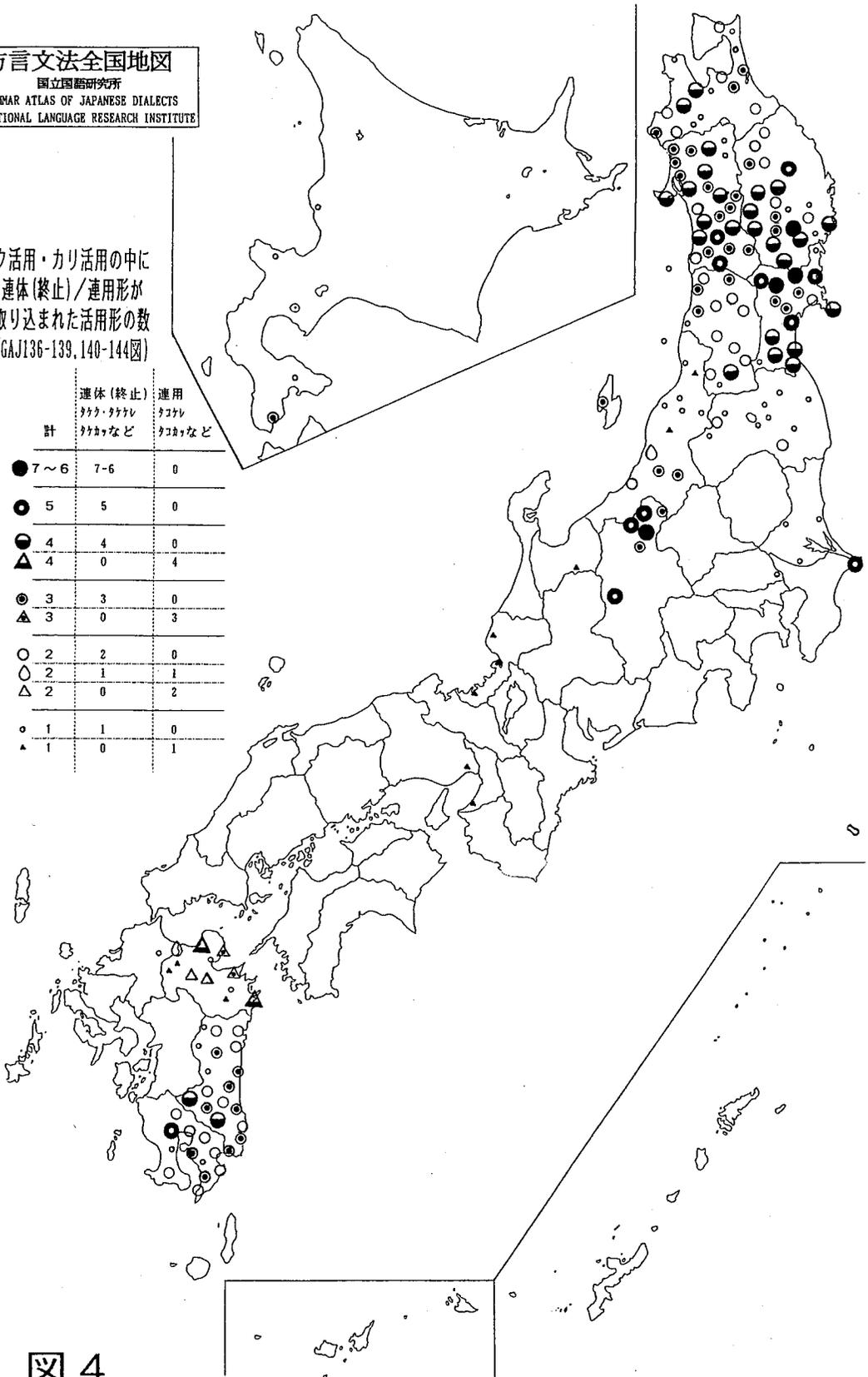


図 4

上記のようにこの現象(「融合母音取込型」)の発生する原因を考えると、極めて言語内の要因・事情によるもので、母音の融合を内包する方言においては宿命ともいえるもののように思われる。ゆえに、あちこちでばらばらと発生するというようなことがありそうだが(千葉の銚子に見られるのはそれにあたるものだろう)、実際にはかなりまとまった分布の見られることは興味深い。

特に東北地方では秋田・山形・岩手・宮城の県境地域をピークとした移行性分布を示唆する分布を示しており、連続性を持ったもののように見える。ただし、ピークを想定した地域はかなり山深い地域(いわば辺境)で、東北地方全体について、ここを発信源として広まったと解釈するのは無理があろう。言語地理学的にはむしろ逆周圈的とも言える。

ところで、東北地方では北の方で、九州でも南の方で盛んであるが、これは、これらの地域がシラビーム方言もしくはそれに隣接した地域であることが関わるように考えられる。シラビーム方言においては、長母音の短呼がかなり規則的にあてはまるためシク活用相当の形容詞は次のような活用を持つ。

「珍しい」 メズラシ メズラシク メズラシカッタ

そうすると、融合母音取込型も融合母音が短呼しているので、これに並行した活用となる(実は(3)ではもうちょっとすっきりしなかったのがここで体系的に整合する)。

「高い」 タケ タケク タケカッタ

このように、活用体系の内部の事情から融合母音取込型が発生し、そこに音韻的な条件が重なって、安定・定着したと考えると分布の説明もうまく行きそうである。

従来、このような現象をもっぱら指して、「無活用化」といわれることがあったが、「無活用化」というよりも、いったん複雑になったものに「整合化」をはかっていると考えられ、用語の吟味が必要のように思われる。ここではそのメカニズムの一端を考察してみたものである。

#### 4. 形容動詞の活用

形容動詞の活用は表5に示した。

残されたスペースの関係から簡単なコメントを記すにとどめる。

連体形と終止形の区別はなく、ナリ系の形式がまったく認められないのが特徴である。naruとの接続において、助詞を介さない点については『報告書』VI章(佐藤(1994))を参照。ナリ系の形式が認められないことについては、音韻的にダ・ナの混同があったということはこの地域では考えにくく、やはり、方言文法史上の問題として扱うべきであろう。全国を見渡してみると、もっぱらダ(デアル)系を用いる当該方言のような地域もあれば、もっぱらナリ系を用いる地域もあるようで、前者については仮定条件の接続助詞「なら」に相当するところでダ(ラ)バを用いる地域と(境界は一致しないが)分布に重なりが見られる。このような点も視野に入れて通時的に考察することが必要かもしれない。

表5 形容動詞の活用表

	静かだ	お洒落だ	
	suzuga	koQpe	語幹
活用形 番号			主な後続の助動詞・助詞 ないしは単独での意味・用法
1	de	de	nε(否定)
2	da	da	言い切り
3	-	-	naru(になる)

## 5. むすび

以上、鶴岡市大山方言の用言の活用について、『報告書』Ⅳ章をもとに共時的な概要を記し、通時的背景を考察した。残された課題もあるが、この方言の一側面が持つ通時的な問題に対して、ある程度の答が出せたものと考えられる。

方言の記述的研究というものは、たった1地点の少数の話者の言語の記録に過ぎないという側面は確かにある。しかし、すべての方言研究の(また言語研究の)出発点はまさにそこにあることは言うまでもなく、そこを徹底的に掘り進むことによって、全体を見渡す道の見えてくることはおおいにあると思う。

木を見て森を見ないことは問題であるが、一方で、森を見て木を知らないのもさびしいことである。両方知りたいというのは欲ばかりかもしれないが、おたがいに持てる情報を補い合うことによって真実に近づくものではなかろうか。

御教示をお願いするとともに、率直な御意見をお待ちしています。

## 参考文献

- 井上史雄(1981)「音韻変化の伝播過程－荘内方言の動詞におけるr脱落」  
『方言学論叢Ⅰ』(三省堂)
- 井上史雄(1994)「鶴岡方言の音韻」『鶴岡方言の記述的研究』(秀英出版)
- 大西拓一郎(1994a)「鶴岡市大山方言の用言の活用」『鶴岡方言の記述的研究』(秀英出版)
- 大西拓一郎(1994b)「活用の類と統合－全国方言の動詞の活用の通時的対応と『方言文法全国地図』を通してみた分布－」『第219回都立大学方言学会配付資料』
- 国立国語研究所(1953)『地域社会の言語生活－鶴岡における実態調査－』(秀英出版)
- 国立国語研究所(1959)『日本方言の記述的研究』(明治書院)
- 国立国語研究所(1974)『地域社会の言語生活－鶴岡における20年前との比較』(秀英出版)
- 国立国語研究所(1991)『方言文法全国地図』第2集(大蔵省印刷局)
- 国立国語研究所(1993)『方言文法全国地図』第3集(大蔵省印刷局)
- 国立国語研究所(1994)『鶴岡方言の記述的研究－第3次鶴岡調査報告1－』(秀英出版)
- 佐藤治助(1992)『心に残る庄内語』(鶴岡書店)
- 佐藤治助(1994)『続 心に残る庄内語』(鶴岡書店)
- 佐藤亮一(1994)「鶴岡方言における助詞「サ」の用法－共通語との対応を中心に－」  
『鶴岡方言の記述的研究』(秀英出版)
- 斎藤義七郎(1934)「山形県村山方言の助動詞『ケ』」『土の香』74
- 斎藤義七郎(1959)「山形県北村山郡東根町」『日本方言の記述的研究』(明治書院)
- 斎藤秀一(1936)「荘内方言に於ける複語尾」『方言』6-20
- 篠崎晃一(1994)「鶴岡方言の授受表現」『鶴岡方言の記述的研究』(秀英出版)
- 渋谷勝己(1994)「鶴岡方言のテンスとアスペクト」『鶴岡方言の記述的研究』(秀英出版)
- 新田哲夫(1994)「鶴岡方言のアクセント」『鶴岡方言の記述的研究』(秀英出版)

## 【付記】

時間のかかるやっかいな調査に対して、粘り強く相手をし、教示を下さっている話者、佐藤治助氏に深謝申し上げます。佐藤氏は自身強い郷土意識を持ち佐藤(1992・1994)のような著書を著しておられ、極めて協力的に教示を受けることができた。そして、佐藤氏が研究に取り組んでおられる斎藤秀一の目指そうとしたものに本稿がいくらかでも近づけたとすれば幸いである。

また、地図作製にあたってはいつものことながら研究所同室の白沢宏枝氏の手をわずらわせた。ここに記して謝辞にかえる。